

教科書教材を読みなおす (X) 小川洋子「バックストローク」論

— 依存する家族像 —

木村 功

一、はじめに

本論では、小川洋子（一九六二年三月～）の「バックストローク」を取り上げる。本作品は、「海燕」一九九六年一月に発表され、のち『まぶた』（二〇〇一年三月、新潮社）に所収された。その後高等学校国語教科書「現代文B」「精選 現代文B」（教育出版）、「探究現代文B」「新探求現代文B」「現代文B」（桐原書店）に採録され、文学教材としても認知されている。先行研究、教材研究が多い作品ではないが、現代文学を代表する作家の作品の読解を通じて、その人間観や世界像を理解することは、人間の言語活動と密接に関わる言語文化への興味関心を育む上で、有益な活動と考える。

その意味でも「バックストローク」を論じる前に、まず、小川洋子の文学観がどのようなものか、その特徴について概観しておきたい。幸い小川は自分の方法論や文学観につ

いて言及することが多い。

『博士の愛した数式』の場合も、やはり橋を架ける作業が行われています。博士がいて、ルートがいて、私（家政婦さん）がいる。この三人が非常に安定した強固な関係を築けるのはなぜかというと、博士の記憶が八十分しかないからです。彼は、一瞬を繰り返しているだけなのです。継続した時間の中でお互いの人格をぶつけあったり、情念を戦わせたりしていい。八十分しか記憶がもたないということで、そういうことのできない状況に陥っている。これとまったく正反対に数は永遠です。比喻的な永遠ではなく、絶対的な永遠です。一方、博士たちが暮らしている、過ごしている時間は一瞬です。この間に橋を架けることが必要になってきたわけです。永遠と一瞬。あるいは、数と言葉。正反対のように見える概念を、一つの王国の中に共存させたいと思って書いたのが

『博士の愛した数式』です。結局、八十分を繰り返して生きている三人は、ハムスターが小さなカゴの中にくるくる廻っているように、八十分を繰り返すことで、ある種の永遠を感じているのです。八十分は一瞬だけれども実は永遠であるというふうに、本来矛盾するものが矛盾しないで共存できた。だからこの三人は至福の時を過ごすことができたのではないかなと思います⁽¹⁾。(傍線引用者、以下同)

傍線部のように小川は、永遠／一瞬、数／言葉という〈正反対〉のように見える概念〉について、〈本来矛盾するものが矛盾しないで共存〉させるという、独自の創作法を述べている。正反対で矛盾する概念を共存させるための、架橋の作業として登場人物たちは配置され、その結果として作品が紡がれるのである。

次に、小川自身が度々言及しているように、小川の創作活動に強い影響を与えているのが、ホロコーストと「アンネの日記」である。人間に極限の体験を強いたそれらの政治的行為とその記録から、小川が何を見出しているのかが分かるのが、以下の引用である。

テレビンの子どもたちにとっての収容所、そしてアンネにとつての隠れ家は、悪意によってもたらされたマイ

ナスの場所でありましたが、周囲の大人たちや本人の才能によって、そこを強い守りとすることができました。

その強固な殻の中で、自分とは何かを問いかけ、それを表現し、自己を高めていったのです。一旦閉じこもることによって、外の世界と適度な距離を取り、自分と一対一で向き合うことによって、孤独を手に入れる。その孤独が人を成長させるのだと思います⁽²⁾。

小川は、世界と距離を取った孤独の重要性に着目している。孤独が、自分と一対一で向き合い、自己理解を進め、成長を促すと考えているからである。この考えを具体化したのが「六角形の小部屋」(『葉指の標本』平成六年一〇月、新潮社)で、「語り小部屋」という装置を通して、登場人物たちが自己理解を深めていく姿が描かれる。小川にとつては、孤独こそが自己と向き合い、自身について問いかけ、成長するための必要条件なのである。そして物語については、以下のように述べる。

物語とはまさに、普通の意味では存在し得ないもの、人と人、人と物、場所と場所、時間と時間等などの間に隠れて、普段はあいまいに見過ごされているものを表出させる器ではないでしょうか。(中略) あいまいであることを許し、むしろ尊び、そこにこそ真実を見出そうと

する。それが物語です⁽³⁾。

小川にとって〈普通の意味では存在し得ないもの〉〈普段はあいまいに見過ごされているもの〉を表出させる器として、物語はある。この説明に従い、「バックストローク」の世界で見出される「真実」とはどのようなものか、以下に明らかにしたい。

二、監禁と共依存

「バックストローク」は、中学生まで優れた水泳選手であった弟を持つ「わたし」を語り手として、家族の崩壊を物語る短編小説であるが、物語の冒頭は、〈今まで自分は何個のプールと出会ってきたのだろうか、と考えることがある。(中略) プールがあるだけで、それはわたしにとって特別な風景になる。〉というプールを対象とした述懐から始まる。〈わたしは泳ぐのが嫌いだった。〉という語り手の「わたし」が、なぜプールを〈特別な風景〉として見るのか、読者に疑念を抱かせる導入部である。後で明らかにするように、「わたし」とその家族の人生にとって、プールは重要な要素であった。

その後「わたし」の語りは、〈一年半ほど前、雑誌に連載する長編小説の取材で、東欧の小さな町を訪れた時のことだった。町のはずれに、ナチス・ドイツ時代の強制収容

所があった。〉と、ナチスドイツ時代に強制収容所に作られたプール遺構に言及する。

青年が指差したトンネルの入り口の脇に、プールがあった。それはあまりにも不意に現われ、わたしを戸惑わせた。水は入っていないかった。25×15メートルのごく標準的な大きさだったが、プールサイドにはたつぷりと余裕があった。ステップの手すりは錆つき、コンクリートはひび割れ、すき間から雑草が伸びていた。もう長い間、人の泳いでいないプールだと分かった。

「収容所の看守とその家族が、ここで休日を楽しみました。囚人たちが作りました」

青年は言った。

今まで目にしたなかで最も痛ましく、昔わたしの家にあったのと、最もよく似たプールだった。

ここでナチスドイツの強制収容所という歴史的アイコンが登場することに、読者は唐突の感を免れない。小川文学に親しんだ読者には、小川の「アンネの日記」に対する並々ならぬ関心の強さはよく知られている所である。「バックストローク」を発表する二年前の一九九四年六月三〇日から七月九日にかけて、小川はアンネ・フランクゆかりの地であるオランダとポーランドを編集者とともに旅行し、

『アンネ・フランクの記憶』（一九九五年八月、角川書店）をまとめている。

引用部の最後で、冒頭では言及されなかった「わたし」の家にあったプールの存在が語られる。それは、囚人の作ったプールと〈最もよく似たプール〉と類比されることで、その収容所のプールの「痛ましさ」も「わたし」家のプールに上書きされることになる。しかもそのプールサイドからは、処刑広場への入り口が見下ろせたのである。〈それほただのコンクリートの穴だった。巨大な石の棺だった。中は途方もなく深い空洞に満たされていた〉という記述や、〈プールはそこにじつと横たわっていた〉という擬人法を用いた記述があり、プールは収容所の犠牲者たちの「死」を象徴するものとして表わされている。では、なぜそのような強制収容所跡のプールが、「わたし」の家にあったプールとリンクするのであろうか。

〈弟は水泳の選手だった。背泳ぎが専門だった。三つの時、近所のスイミングスクールへ通うようになって以来、毎日泳いでいた。本当に毎日だった。（後略）と、「わたし」は弟のプロフィールを紹介する。三歳から水泳を習いに通うことはあつても、「毎日」は多すぎる回数であるという気付きが、「わたし」の弟の生育環境の歪さへの気付きへと導かれる。『偶然的祝福』（二〇〇〇年一月、角川書店）には、「バックストローク」の原案とされる「盗作」が収

められており、その中にも、同様の記述がある。ただ「盗作」の弟は、〈特別な泣き方をし〉て人の死を予言する存在としても描かれていた。そして左腕を挙げて下ろさないまま、ある日ホットケーキを焼いて姉に食べさせた後、精神科へ入院し、一〇年以上入院していることが物語られる。「盗作」の弟が最終的に精神科へ入院することになったように、「バックストローク」の弟も精神科と明記はされないものの、同じように病院へ入院したことが最後に紹介される。それというのも、弟は以下のような行動を取るからだ。

泳いでいない時、彼はたいてい部屋の隅の方にいた。特に、飾り戸棚の陰や、食器乾燥機と冷蔵庫のすき間や、踊り場の突き当たりにある納戸の中が彼のお気に入り場所だった。そこに窮屈そうに身体を丸めていた。身体を小さくしていればいるほど、いい事があると思ひ込んでいたのかようだった。

この幼い弟はプールに通う一方で、部屋の隅が自分の居場所だと考えており、「隅」（閉所）へのこだわりは、一五歳の誕生日を迎えてからの「引きこもり」行動へと接続していく。

小川洋子の作品に五つの〈アンネ・コード〉を指摘した中村三春は、〈監禁は、『アンネ・コード』の第三の要素〉

と指摘し、〈何らかの監禁状態にある人物の物語〉とした。〈さらに指摘すべきことは、小川のテキストの場合、監禁が自己監禁の相を顕著に帯びてくることである。〉(中略) 不可抗力の監禁と、その監禁がむしろ自らの意志によって行われること。その両者のあわいにおいて、小川洋子的な物語の基本的構造が構築されるのである。⁽⁴⁾として、登場人物の自己監禁という特徴的な行動の存在を指摘している。この意味で、弟が部屋の間で窮屈そうに身を丸めている姿は、中村の指摘する自己監禁以外の何物でもない。以下の引用についても、中村の指摘を踏まえて読み解くことができる。

弟とは二つ違いだったが、いつの頃からか彼の方が年上だと感じるが多くなった。(中略) 地元の新聞に写真が載ったり、他のスイミングスクールからコーチがスカウトにやって来たりもした。こうした状況が彼を年齢よりも大人に見せていた。練習練習で、友だちと無邪気に遊び回る暇もなかった。わずかでも時間があれば、彼は隅に隠れていた。それだけが唯一の息抜きだった。

水泳に秀でていた弟は、心身の成長よりも社会的成長の方が上回っていたことが確認できる。一方、〈わずかでも時間があれば、彼は隅に隠れ〉て〈唯一の息抜き〉をしてい

たことから、水泳を通して社会で評価される自分の地位と、自分の世界との落差に依然強いストレスを覚えていることが推測される。それが彼を部屋の間へ自己監禁する行為を採らせるのである。年齢にしては高い社会的地位と強いストレスを接続しているのが、水泳であることはいうまでもないが、現時点での弟にはその相関が理解されていない。

その弟は小学二、三年生の頃に、「わたし」に自分の前世の話をして聞かせる。羊飼いだっただ弟は、ある日洞窟に迷い込んで、人食いコウモリに襲われて死んだことを物語る。そして「で、今度はママのお腹に入らなくちゃならないから、洞窟の中を一生懸命走ったんだ。もう間に合わないかと思ってひやひやしたよ。(後略)」と、死んでいるはずなのに、「一生懸命走った」とユーモアを交えて見せる。それに対して「わたし」が示した反応に、注目したい。

本当にママのお腹で間違いなかったんだろうか。わたしは考えた。弟は間違えてしまったんじゃないだろうか。その疑いはわたしを苦しめた。弟が死ぬ光景より残酷だった。だから黙って口には出さなかった。

弟が物語ってみせた前世の話に対して、「わたし」は、魂の弟が間違えて母親のお腹へ転生したのではないか、〈死ぬ光景より残酷〉な間違いを起こしたのではないかと考え

て、苦痛を覚えるのである。ここに、母親に対する「わたし」の距離感を読みとることが可能である。

そのような「わたし」の述懐に続けて、弟が今度死んだら「骨にして、お姉ちゃんのお腹に入れておいてよ。それがいい」と述べることは、「わたし」が母親へ距離感を示した後だけに、弟からの「わたし」に対する信頼を示して示唆的である。弟の魂が「わたし」のお腹に入ると、転生（「わたし」の子供）になつてしまいが、骨にして入れておいて欲しいというのは、「わたし」への一体化（帰属）願望と理解出来る。弟の前世語りに出てくる洞窟や「お腹」といった狭い場所が、部屋の間接の換喩であることは見易い。確認したいのは、弟が、母よりも姉の「お腹」を希望したということである。

それでは、弟と母親との関係は、一体どのようなものであったのだろうか。以下では、「わたし」と弟の父親と母親に関する情報が提示されている。

結局父がどうやって生計を立てていたのか、いまだによく分からない。祖父の絵を売り、遺産を切り売りして食べていたのだと思う。（中略）父の仕事部屋にはしょっちゅう得体の知れない客が出入りしていた。

母はただ弟を愛することのみに生きた。もともと彼女だけが信じる愛し方で、という意味だけだ。

弟がいいタイムを出すこと、それが母の至上の喜びだった。そのためならどんな犠牲でも払ったし、わたしや父に対しても同じ犠牲を要求した。（後略）

父親は、（日頃は骨董品ばかり撫で回し、家族には無関心）な、いかかわしい画商であり、母親は、夫や「わたし」ではなく、弟だけを偏愛する人物として紹介されている。それも、（彼女だけが信じる愛し方）とあるように、優れたスイマーとしての息子を愛しており、部屋の間接が好き息子ではない。ここで母親が（どんな犠牲でも払った）のは、弟のためでもあるが、同時に、優れた息子を持つ母親である自分の為でもあることは見やすいだろう。このように両親については、家族よりも骨董品を愛する父親と、息子のために献身しながら、同時に息子を支配する母親の姿が描き出されている。特に「わたし」によって詳述されるのは、弟に対する母親の言動である。

レースが終わると、選手のロッカールームまで母は出向いて行き、人目もはばからず弟を抱き締めた。

「よくがんばったわ。ママはうれしいわ」

何着になつても、母は弟を誉めた。誉めて誉めて自信をつけさせる方が、いい記録につながると信じていたからだ。彼女がよく読んでいた『スポーツ精神コントロー

ル法』という本に、そう書いてあった。

このエピソードは、弟が中学へ入学する前に家の庭にプールが作られるエピソードの前の時点だが、「わたし」が母親とその行動をどのように評価しているかを物語っている。「わたし」の目には、母親が弟を誉めるのは、母としての愛情からではなく、《いい記録》のために、弟をコントロールするためだと理解されている。また、愛読書の名称にも留意したい。このような「わたし」の母親と弟の関係性は、共依存と理解することができる。

共依存症者が、依存症者に深く関わり、自らの人生を犠牲にしてまで対象者の行動を支配、制御しようとする観念に強く捕らわれ行動している状態 (enabling) が共依存の状態である。この行動は、自己犠牲による他愛的な態度であり、一見献身的に見えるが他方、自己中心的態度と考えることもできる⁽⁵⁾。

弟は、よく知られているギャンブル依存症やアルコール依存症ではないが、「隅」に依存していることは明らかだ。その弟のために、すさまじい応援をしたり、誉めたり、庭を潰してプールを作ったりする母親の献身は、一見息子への強い愛情として理解できるが、息子を支配し、自分の理

想型に育て上げようとする欲望の投影なのである。愛情という相手本位の感情が、ここでは自己犠牲による献身の形を借りた他者への支配という自己中心的態度となっている。そしてこの関係性は、愛情と支配という相矛盾するものを共存させている点で、小川が好む構成であると言える。

二人は不格好なダンスを踊っているように見えた。弟は母に身体を任せ、されるがままになっていた。照れ臭そうにも、迷惑そうにもしなかった。ただ、どこか遠くを見つめていた。背泳ぎなんかよりもっと深刻な問題について、思索を巡らせているかのような瞳だった。

(中略)

少なくとも弟のおかげで、あの時代、わたしたち家族はどうか絆を保っていた。弟の背泳ぎ、それがすべての源であり、唯一の救いだった。

さらにこの引用部からは、問題が母親と弟の共依存だけではないことが読み取れる。「わたし」が、弟を中心に描き出す家族の姿は、《弟の背泳ぎ》、すなわちバックストロークを《すべての源であり、唯一の救い》である「絆」として、かろうじて繋がっているだけの不安定な家族像である。実はこの家族は、母親と弟との共依存関係だけでなく、父親や「わたし」も、弟に依存していたのであった。いわ

ば家族という檻に、弟は「監禁」されていたのである。そしてこの時「わたし」は、母親の狂喜ぶりとは対照的な、家族の中心にあって〈どこか遠くを見つめ〉、〈背泳ぎなんかよりもっと深刻な問題について、思索を巡らせているかのような瞳〉でいる弟の姿を捉えている。思春期を迎えて内省を始めている弟が、自分の置かれている状況を理解し、対策を講ずるに至るまでの間が遠いものではないことがうかがえる。

しかし、そのような弟の思いを知らずに、母親は弟の中学入学前に次の行動に出る。

「庭にプールを作るわ」

弟の中学入学が近づいたある日、母は宣言した。

（中略）

さっそく工事がスタートした。レンガのアプローチはがされ、芝生は掘り起こされ、サンデッキはつぶされた。やがて18×7メートルのプールが出現した。それは庭のほとんどすべてを占領した。家全体を圧倒するほどの存在感を放った。門から玄関まで、生け垣とプールの縁の間を、足を踏み外さないよう用心して歩かなければいけなかった。訪ねてくる人は誰もが、門のところまで一歩たじろいだ。

家中どの部屋からもプールが見えた。それしか視界に

入ってこなかった。こんな小さなプールが役に立つとは思えなかったが、言い付けどおり弟は真冬以外は毎日そこに入った。（後略）

母親が庭を潰して出現させたプールが、〈家全体を圧倒するほどの存在感を放った〉ことに留意したい。繰り返になるが、プールも、母親が息子のために作った愛情のなせるわざであるが、それは同時に母親の息子に対する支配の象徴である。それが今や、家全体を圧倒し、家中の視界を妨げていることは、母親の息子への欲望が極限域に達したことを意味している。そして母の〈言い付けどおり〉に弟がプールに入り続けることは、依然母親の支配下にあることを示している。〈家全体を圧倒するほどの存在感を放った〉プールによって、弟を逃げ場もなく、精神的な危機に追い込まれることになっているのである。プールは、家族に続く新たな檻となり、弟はその中でも「監禁」されるのであった。

しかし「わたし」はそのようなプールを〈異様なプール〉と評しながら、その一方で肯定的に評価していたのである。

異様なプールではあったけれど、たたずまいはびくつとするほど綺麗だった。底のブルーと澄んだ水の色が溶け合い、それが太陽の光や、夜の闇の中に浮かび上がっ

て揺らめいた。枯葉でも虫の死骸でも、水面に落ちたとたん、特別選ばれたもののようにきらめいて見えた。

弟が泳いでいるとますますその美しさも際立った。彼の身体から広がってゆく波、足先から沸き上がるしぶき、息を吸い込む気配、それらすべてがプールをいとおしく彩った。

〈異様なプール〉でありながら、枯葉・虫の死骸でも水面におちると〈特別選ばれたもののようにきらめいて見えた〉とは、〈太陽の光〉と〈夜の闇〉の組み合わせと同様、マイナスとプラスを共存させる小川一流の表現となっている。さらにそこを弟が泳ぐことで美しさが際立つ場所となる。こうして庭のプールは、母親の支配欲を最大限に象徴しつつ、「わたし」の語りを通じて、美しく愛おしむべき場所としても表現されるのである。マイナスとプラスを接合させる細部の表現と、プールに関する内容上のマイナスとプラスの要素が呼応し合った場面が構成されている。

しかし、留意しなければならないのは、母のプール作りを批判的に述べていた「わたし」自身も、プールで泳ぐ弟を称揚することで、結果的には母親と同様に弟を檻へと追い込む役割を果たしてしまっていることである。弟に依存することで家族関係が辛うじて保たれていることを自覚しながら、プールが弟の檻であるという本質を隠蔽している

点で、「わたし」の語りは共犯的であるといえよう。

三、左腕と隅

しかし、プールを介した母と「わたし」の共犯的な関係は、弟が一五歳の誕生日を迎えた日を境に終わりを迎えることになる。

事の始まりは、弟の十五歳の誕生日だった。一年間で身長が十六センチも伸び、筋肉がついて泳ぎも力強くなった。身長が大きくなった分、隅に引きこもるのはますます窮屈になってきたが、その癖は治らなかつた。オリンピックの強化選手に選ばれ、一週間後にはジュニアの世界選手権に出場するためアメリカへ発つ予定になっていた。

一五才の誕生日を迎えたその日は〈なぜかいろいろな物が壊れた一日〉であり、電話、テレビ、クリームシチューを入れた鍋の把手二つが壊れた。そして翌日、〈次の朝目覚めた時から、弟は左腕を挙げたきり、下へ降ろさなくなってしまったのだ〉。

なぜなのか。なぜ手を降ろさないのか。その問いが繰り返された。しかし弟は決して理由を言おうとはしなかつた。理由だけでなく、ほとんど喋らなくなつた。学校

にも行かず、プールには入らず、もちろんアメリカ行きも中止になった。もつと隅へ、もつと隅へと引きこもるようになった。

彼は家中のどんな隅も見逃さなかった。洗濯籠の中、火の消えた暖炉の奥、ソファーの下、束ねたカーテンの裏……。思いもつかない場所を見付けだしては、そこへ身体を押し込め、長い時間うずくまっていた。そうしている間も、腕はそのままだった。片手を挙げている分、より狭い場所に隠れることができたのだった。

あらゆる試みがなされた。何人もの精神科医、カウンセラー、心理学の博士、宗教家が弟と面会した。母は例の占い師のところへ、毎日足を運んだ。入院もした。転地療養もした。でも駄目だった。

ひとときたりとも、弟は腕を降ろさなかった。ほんの少し肘をゆるめるとか、掌の向きを変えるとかいうこともなかった。(後略)

左手を降ろさない理由を述べず、喋ることもせず、学校・プールへも行かなくなり、へもつと隅へ、もつと隅へと引きこもるようになった。弟に対して、家族の困惑や様々な対応ぶりが記述されるが、弟がこのようになるに到った原因に、〈弟の背泳ぎ〉を家族をつなぐ〈すべての源であり、唯一の救い〉と見なし、依存している「わたし」を含めた

家族は気づこうとしない。

弟が左腕を〈下へ降ろさなくなってしまった〉のは、オリンピックの強化選手に選ばれるまでになったにも関わらず、弟の〈隅に引きこもる〉(癖は治らない)と語られており(「わたし」は癖と理解している)、弟は顕著な社会的成長／成功を遂げる一方、心の成長は子供時代のままであることが分かる。両者の不整合は弟の中で限界を迎えつつあり、弟はその内圧の限界に対処する必要があったのである。それこそが、〈左腕を挙げたきり、下へ降ろさな〉いことだった。腕を上げたままだと、心臓より上の腕には血流が届きにくくなり、やがてそれは不自然な姿勢に従い血行不良を起こすことになる。母親とその愛情／支配に対して、言葉で泳がないということが言えない弟は、泳がない意志を左腕を挙げたままの姿勢で示すことで泳ぐことを拒否し、そのことで母親からの支配も拒絶しようとしたのであった。

母はヒステリーを起こし、絶望し、鬱状態に陥った。「あごを引いて。あごを引いて」と、一日中独り言をつぶやいた。どんどん占いの世界にのめり込んでゆき、呪いを恐れ、方角が悪いからと言っては応接室の半分をつぶして浴室にしたり、家中の壁紙を毎月のラッキーカラーに合わせて張り替えたりした。父は底無しのアルコー

ルの世界へ沈んでいった。

それでもプールの水だけは抜かれなかった。入る人などいないのに、プールの水はいつもあふれるほどに満ちていた。それが涸れてしまう時、わたしたちは最後の救いを失うことになると思んな知っていた。

〈弟の背泳ぎ〉をへすべての源であり、唯一の救い」と見なして繋がっている「わたし」の家族が、弟が泳がなくなったことで、家族の「絆」が失われ、崩壊していく様子が、ここには描かれている。しかし、それでも弟が再び泳ぐ可能性を捨てきれない家族は、その回復を期待しながら依存する対象を弟からプールへ変更せざるを得なかったのである。かくしてプールは、弟の檻から、〈弟の背泳ぎ〉という「絆」を失った家族のための、〈最後の救い〉の場所へと変位した。その一方で、弟の左腕は血行不良により、着実に損なわれつつあった。以下は、五年後、弟が二〇歳の時の様子である。

次第に左腕は血行が悪くなって黒ずんできた。特に指先は枯れた小枝のようだった。肩の関節は強ばり、皮膚は潤いをなくし、筋肉は萎縮していた。何かの拍子にそこへ触れると、はっとするほど冷たかった。身体の中で左腕だけが、勝手に死に近づいてゆこうとしていた。

そんな弟に、二三歳の誕生日を迎えたわたしは、〈左腕がどうあろうが、わたしはただ弟の背泳ぎが見たいだけだった。それ以上の願いは何もなかった。〉と、弟にもう一度だけ泳ぐことを依頼する。

（前略）プールに近づくと冷気を含んだ空気が足元を漂った。水はきれいだった。ゴミ一つ浮いていなかった。四つのライトが青白く水面を照らしていた。

いつものとおり、父は仕事部屋で酔いつぶれ、母は占いの師のところへ出掛けていた。家中の電気が消え、プールだけが闇の中で呼吸していた。

「無理しなくていいのよ。ただ浮かんでるだけでいいの」心配になってわたしが声を掛けると、彼は背中を向けたまま「うん」と言った。身体は予想していたほど衰えていなかった。胸板は厚かったし、腹筋も引き締まっていた。選手だった頃とほとんど変わっていないかった。

しかしだからこそ、余計に左腕が目立った。もう身体の一部とは思えなかった。かつてそれが力強く水をかいていた記憶など、どこにも残っていないかった。彼の苦しみがすべてそこに凝縮され、化石となって宙に突き刺さっているようだった。

そもそも記録に拘った母親とは違い、（わたしは弟の泳ぐ姿を見るのが好きだったし、彼は実に美しい泳ぎ方をしたからだ。）とにかく全体の調和がすばらしかった。（と、弟の美しい泳ぎ方とその姿に「調和」を見いだしていた。もう一度弟の背泳ぎを見たいと考えたのは、既に失われた家族の絆のためではなく、自分の「満足」を求めたためであった。しかし「わたし」は、プールで弟の姿と左腕を見たことで、改めて（彼の苦しみがすべてそこに凝縮され、化石となって宙に突き刺さっているようだった。）と、母親の支配の下で泳ぎ続けた弟の苦悩を再認識するのである。その左腕の有様は「わたし」も、家族の「絆」を保持するために、弟に依存していた結果であった。

その「わたし」が見ている前で、弟の左腕がついに肩から外れてしまう。泳ぎ続ける弟の傍らで、「わたし」は左腕に手を伸ばす。

わたしはそれを拾い上げようとした。濡れるのも構わずプールの縁にひざまずき、水面に手をのぼした。水は冷たかった。拾い上げて胸に抱き寄せ、頬ずりし、温めてやりたかった。自分にできるのはただそれだけだと思った。

もう少しで届きそうなのに、どんなに身体をのぼしても、左腕は指先のほんのわずかに向こうにあった。

傍線部に、「わたし」の弟に対する愛情が記されていることは明らかだろう。しかし、それでも弟の苦悩を受けとめきれていなかったことは、「わたし」の指先が（もう少しで届きそうなのに、（ほんのわずかに向こう）の左腕にどうしても届かない隔絶として表現されている。そしてそれは、「わたし」から弟への、埋めることができない距離の存在を象徴している。それというのも、「わたし」も弟に依存して彼を苦しめていた一人だったからである。こうして弟は左腕を失い、家族にとって（最後の救い）であったプールの水は抜かれてしまう。

水を抜いたプールは、止めようもなくどんどん衰えていった。コンクリートはすぐにひび割れ、排水溝は錆つき、ゴミの吹き溜まりとなった。それはわたしたち家族の記憶の残骸として、長くそこにとどまった。

父が肝硬変で死んだ時、棺は庭を通ることができず、プールの底を斜めに横切つて霊柩車に乗せられた。母は背泳ぎに関する品、水着、練習日誌、記録のグラフ、写真、賞状などを、すべてプールで焼いた。そのため、底には煤の跡が残った。

弟からは一ヵ月に一度くらい手紙が来る。病院の中庭には、貝殻の形をしたプールがあって、自由に入ることができます。清潔で気持ちいいプールです。掃除は全部

僕たち患者が交替で受け持ちます。ただちょっと狭いので、4ストロークで端から端まで行ってしまうです。物足りませんが仕方ありません。ここでもやはり、僕は背泳ぎ専門です。みんな上手だと誉めてくれるので、得意になって泳いでいます。――毎回、どの手紙にもプールのことが書いてある。彼が入院して、はや十年になる。

プールが〈家族の記憶の残骸〉であるというのは、〈弟の背泳ぎ〉が家族の絆であり、プールはその弟のための場所／檻であり、弟が泳がなくなっても〈最後の救い〉として、家族にとって重要な場所であったのが、家族が崩壊した今、プールはかつてあった「家族の記憶」の残骸に他ならなくなったということである。母親が夫の死と共に息子の背泳ぎの記録をプールで燃やすのは、彼女の中の「息子」を葬ったことを意味している。

作品冒頭部で、「わたし」が強制収容所跡のプールを、〈わたしの家にあったのと、最もよく似たプールだった。〉と述懐した理由はここに明らかであろう。強制収容所跡のプールと「わたし」の家のプールは、支配の残骸として存在している点で似ていたというのである。

誕生日の出来事の後、小説の時間は一〇年が経過する。大学を卒業し、〈印鑑を作る会社に就職した。会社が休みの日には趣味で小説を書いた。〉のが、「わたし」が二二歳

の時であり、二三歳の誕生日の時に、弟がプールで泳いで左腕が外れたのである。現在「バックストローク」を物語る小説家の「わたし」は、少なくとも、三三歳以上の年齢になっている。一方弟は、一ヶ月に一回寄越す手紙で、病院のプールで泳いでいると毎回書いている。母親に泳がされるのではなく、病院では左腕を無くしても自分の意思で泳いでいるのである。家族と離れることで、弟は自分の人生を取り戻した、左腕と一〇年に及ぶ入院生活という代償を払うことで、それも病院の中で。母親の消息については触れられていない。

作品の最後は、強制収容所跡見学の時点に戻る。

「ホテルへ戻って、ゆっくり休みましょうか。駐車場から車を回してきますよ」

「いいえ、いいのよ。どうもありがとう。処刑場へ行きましょう」

わたしは立ち上がった。青年が肩を抱いてくれた。

言うまでもなく「わたし」とガイドの青年が向かうのは、処刑場「跡」である。しかし、「わたし」が〈処刑場へ行きましょう〉ということで、読者には「わたし」が弟の手を想起させた青年に導かれ処刑場へ向かう意味も読みとることになる。そのことにより、部屋の「隅」へ引き込む

弟を間近で見ているが、両親共々弟に依存していたために弟の苦しみを理解しきれなかったこと、結果、弟は病院に一〇年も入ることになり、弟を社会の「隅」へと追いやった自分を含む家族の罪業を意識していることが立ち上がってくるのである。その意味で、「バックストローク」とは、弟を社会の「隅」へ追いやった家族の一員である「わたし」自身を一〇年後の「わたし」が再確認し、断罪する物語であつたといえよう⁽⁶⁾。

四、おわりに

小川洋子は、〈前略〉テーマなどというものは最初から存在していないということです。主題が何か、について私は一切考えていないのです。〉とし、〈言葉で一行で表現できずしてしまえば、別に小説にする必要はない。ここが小説の背負っている難しい矛盾ですが、言葉にできないものを書いてるのが小説ではないかと思うのです。〉〈テーマは後から読んだ人が勝手にそれぞれ感じたり、文芸評論家の方が論じてくださるものであって、自ら書いた本人がプラカードに書いて掲げ持つものではないと考えております⁽⁷⁾。〉と述べている。作家である自分はテーマについて〈一切考えていない〉が、読者や評論家が勝手にそれぞれ感じたり、論じたりするものとしている。つまり小川文学のテーマは、作者から読者側に委ねられているのである。

「バックストローク」の語り手である小説家の「わたし」が、対象としたのはかつての家族である。自分本位に生きる両親と、特に母親から愛情／支配を受け、そこから脱する弟の姿を描くことで、「家族」であり続けることの幸福と困難、愉楽と苦悩が描かれている。そして語り手の「わたし」自身も、その家族の一員として弟に依存し弟を苦しめていたことを、小説家になった今は理解し、弟を社会の「隅」へ追いやった自身を断罪している。

最後に、本論と国語教育との関連について述べて、本稿を締めくくりたい。「バックストローク」は、最初に紹介したように「現代文B」（四単位）の教材として採録されている。「高等学校学習指導要領」（平成二十一年三月）によれば「現代文B」は、目標として〈近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てる。〉ことを掲げている。「バックストローク」は、教授内容として〈2 内容 (1) イ 文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確にとらえ、表現を味わうこと。／ウ 文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすること。〉が期待され、〈2〉ア 文学的な文章を読んで、人物の生き方やその表現の仕方などについて

話し合うこと。〕のような言語活動が期待されている。

弟の年代に近い高校生の立場からは、自分に依存する不安定な家族を支え続けた弟の孤独と、その家族からの解放の物語として読むことができるだろう。弟と家族の関係に関する読解は、生徒自身と家族との関係に転位させることで、個人や家族への省察を深める言語活動を構成する。授業時の指導としては、小説を読んで、生徒一人一人がどのような「物語」を再生産するかがポイントとなる。実際教育実践の場では、〈高校生は、自らの置かれてある位置に近い「弟」に焦点を絞り、自分がある程度まで弟に同一化するようにして、『バックストローク』を読んでいる〉〈高校生にとって、『バックストローク』のような現代的な家族の軋みを背景とする教材の場合、作品への親近感が高まる⁽⁸⁾〉という読解中心の授業や、〈「書店員になったつもりで、この作品の魅力を探し、紹介してください」という課題の下で紹介文を三時間で書き、一時間で発表して聞き手が採点するという、生徒の理解度に合わせた対話型の授業が行われている⁽⁹⁾。本論の第二章・第三章は、読解指導の際に、教師側が示す読解例の一つとして参照できるだろう。

注

- (1) 小川洋子「物語が生まれる現場」〔『物語の役割』筑摩書房、二〇〇七年二月一〇日、七八、七九頁〕

- (2) 注(1)と同じ、一一五頁。
(3) 注(1)と同じ、一一八頁。

- (4) 中村三春「小川洋子と『アンネの日記』——「薬指の標本」『ホテル・アイリス』「猫を抱いて象と泳ぐ」など——」〔北海道大学文学研究科紀要〕一四九号、二〇一六年七月一日〕
(5) 柿澤 暁「共依存症問題についての考察」〔人間学研究論集〕九号、二〇二〇年三月〕

- (6) 高木佐和子は、〈わたし〉がブルをみて思い出す記憶は「家族が崩壊してしまった事が中心で、弟の心の傷をいやしたかったという気持ちは乏しい」。(西田谷洋編『女性の語り／語られる女性 日本近現代文学と小川洋子』一粒書房、二〇一五年二月一七日)と説き、本論とは異なる解釈を示している。

- (7) 注(1)と同じ、六四〜六六頁。

- (8) 小林一之「小川洋子『バックストローク』を読む(後編)」〔教育出版高校メルマガ〕二〇一〇年六月、教育出版 <https://www.kyoikushuppan.co.jp/textbook/kou/kokugo/document/ducu2/3377.html> 20201225確認)

- (9) 太田幸夫「対話的・主体的な学びを目指した授業の一考察」〔国語論集〕一四号、北海道教育大学釧路校国語科教育研究室、二〇一七年三月〕